

ポーランド人のシベリア孤児
数百名を救出した話

川島 順 予科21-7
(越谷市) 航空7-1

パソコンのツイッターを見ていたら、「親日国ポーランドと日本の絆」というタイトルで、100年ほど前、ポーランドの独立運動で当時の帝政ロシアによってシベリアに送られた受刑者の孤児を日本が救った話が記載されていた。その話をたどってみると、伊勢雅臣氏の編集しているJapan On the Globe (142) 国際派日本人養成講座「地球探訪：大和心とポーランド魂」に詳しく紹介されていた。余りにも素晴らしい内容なので一人でも多くの人に見てもらいたいと、その要旨を次に紹介致す。まず、当時のポーランドに付いて解説したい。

1. ポーランドの歴史：

ポーランドは、ロシアとドイツの間に挟まれ、肥沃な広大な平野を持っていたために侵略、滅亡、復活の繰り返しの凄まじい歴史であった。

西暦400年頃のヨーロッパ北部のゲルマン民族の大移動によって、ポーランドには東からスラブ民族が移住してきた。11世紀の初めにポーランド王国が誕生、数世紀に亘って、繁栄したが、1241年突如モンゴルが進入し、3回に亘って侵略と破壊を繰り返した結果、ポーランドは完全に壊滅されてしまった。

その荒れはてた土地にドイツから移民が移住し、14世紀になるとポーランドは統合され、ヤギェウオ朝が復興する。

16世紀になると、ポーランド王朝はリトアニア王朝と合併し、ポーランド・リトアニア王国を建設する。ヨーロッパの大国となり穀物の輸出等により、最大

の繁栄期を迎える。17世紀になると、オスマン帝国等との戦争に疲弊し、衰退期を迎える。

18世紀になると、隣国のロシア、プロイセン、オーストリアの侵略により国土は分割されて1795年にはポーランドは完全に消滅する。

20世紀になり、第一次世界大戦でドイツが敗北した1918年ポーランドは復活される。しかし、第二次世界大戦が始まり、1939年ドイツとソ連に侵略され、再びポーランドは消滅する。

第二次世界大戦でドイツが敗北すると、再びポーランドはソ連の傀儡政権として独立する。そして、プラハの春のワレサの民主化運動で1989年ポーランド共和国として再生した。

2. 1900年初期ポーランドの実情：

ポーランドはロシア、プロイセン、オーストリアの隣国によるポーランド分割でポーランドが完全に消滅した1975年から第1次大戦でドイツが敗れた1918年までは帝政ロシアの属国で、その当時のポーランドの悲惨な状況は、我々馴染みの「軍歌集：雄叫び編」に「ポーランド懐古」として歌われている。

この孤児を救出した話は、ポーランドがやっと独立した1919年頃のこと、当時ロシア国内は革命、反革命勢力が争う内戦状態にあり、極東地域には政治犯の家族や混乱を逃れて東に逃避してきた難民を含めて数十万人のポーランド人がいたといわれている。その多くの方は極寒の凍土を開墾する重労働や食糧不足で病死し、そのため何百人という孤児達が飢えと寒さで悲惨な状況に置かれていた。

3. 「波蘭児童救済会」の結成：

せめてその孤児達を祖国に送り返そうと、1919年9月、ウラジオストック在住のポーランド人の有志によって、「波蘭児童救済会」が結成された。

ところが1920年春、またもやポーランドとソビエトロシアとの間で戦争が起こり、児童救済会が欧米諸国に援助を依頼しても、ことごとく無視され、さらにシベリア鉄道で孤児達をポーランドに送り返すことは不可能になった。

救済委員会は窮余の策として、余り馴染みが無かったが満鉄の警備をしていた日本の関東軍に援助を求めてきた。軍はすぐに外務省に連絡して、児童救済会会長のアンナ・ビルケウィッチ女史の日本訪問の仲介をした。女史は1920年6



月に来日し、外務省を訪れ、シベリア孤児の惨状を訴え、母国帰国の援助を要請した。

ビルケウィッチ女史（中央）

4. 日赤によるシベリア孤児救済事業：

ビルケウィッチ女史の嘆願は外務省を通じて日本赤十字社にもたらされ、僅か17日後にはシベリア孤児救済が決定され、たまたま、シベリア出兵でシベリアに展開していた日本陸軍の手を借りて、シベリア各地の孤児がかき集められた。

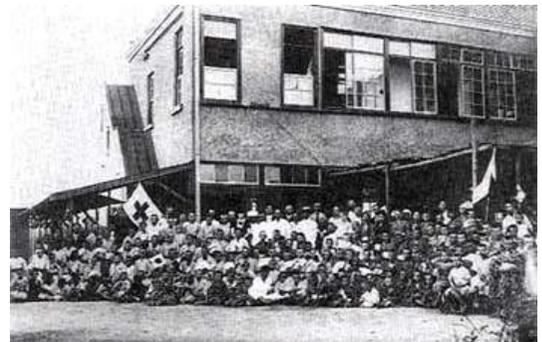


裸同然のポーランドのシベリア孤児達

そして、決定から2週間後には56名の孤児の第1陣がウラジオストックから敦賀経由で東京に到着した。それから翌1921年7月までに5回に亘って孤児375名が東京に送られてきた。

東京に到着した375名の第1次の孤児達は東京府下豊多摩郡渋谷町（現東京都渋谷区広尾4丁目）の「福田会育児所」に收容された。福田会は日赤本社病院に隣接し、設備も整い構内には運動場や庭園があり、子供達を收容するのに適した環境であった。

1922年には第2次救済事業として3回に亘って390名が来日している。第2次の孤児達は、大阪府東成郡天王寺村（現大阪市阿倍野区旭町）の大阪市立大学医学部附属病院の「大阪市公民病院付属看護婦寄宿舍」に收容された。この寄宿舍は新築2階建てで未使用のため清潔で、庭園も広く環境の整った所であった。



大阪の宿舍のシベリア孤児達

5. 日本滞在の孤児に対する手厚い保護

東京、大阪に收容されたポーランドの孤児達は日本赤十字社の手厚い保護を受けた。1921（大正10年）4月6日には赤十字活動に熱心な貞明皇后（大正天皇の御妃）は、日赤本社に孤児達を招き入れ、特に可愛かった3歳の女の子、ギエノヴェファ・ボクダノヴィッチをお傍に召され、その頭を撫ぜながら健やかに育つようにと話されたそうである。

日本に到着したポーランドの孤児達は、当時の日本人の関心と同情を集め、寄付金や慰安品を持ち寄る人、無料で歯科治療や散髪を申し出る人等後を絶たず、また、学生音楽会が慰問に訪れたり、婦人協会が慰安会に招待する等多くの慈善活

動が行われた。



元気を取り戻した孤児達、看護婦と共に

6. 孤児達の回想：

ウラジオストックから敦賀に到着すると、衣服はすべて熱湯消毒された、支給された浴衣の袖には飴や菓子類がたっぷり入っていて感激したこと、特別に痩せていた女の子には、日本人の医師が心配して、毎日一錠ずつ飲むようにと特別の栄養剤をくれたが、大変おいしかったので、一晩で仲間全部食べられてしまって悔しかったこと。真夏に汽車に乗ると、大人の男性が車内に入るやすぐにズボンを脱ぎだしてステテコ姿やふんどし姿になったことに驚いたこと。生まれて初めて動物園に連れて行ってもらって、嬉しかったこと。男の子がたらいで行水しているのを覗き見したこと等…

1人のご婦人が分厚い封筒を取り出した。それは、当時の日本の庶民生活のスナップや京都や奈良など名所旧跡を写した風景写真コレクションで、彼女はそれを戦争の最中も、ひと時も肌身離さず持っていたとのこと。「宝物なら、私も持っています」他のご婦人は、見知らぬ日本人から貰った扇子を、またあるご婦人は、離日時に日本人から贈られた布地の帽子を大事に持参していた。

孤児のひとりの少女が回想でこう述べている。「孤児収容所に訪問された貞明皇后様に抱きしめてもらったことが今でも忘れられない」

また、別の子も「ひどい皮膚病にかかっていた私は、全身に薬を塗られ、ミイラのように白い布に包まれて、看護婦さんにベッドに運ばれました。その看護婦さんは、私をベッドに寝かせると、布から顔だけ出している私の鼻にキスをして微笑んでくれました。私はこのキスで生きる勇気をもらい、知らず知らずのうちに泣き出していました。」

9歳の時に来日したポーランド・ワルシャワ在住のハリーナ・ノビツカさん(故人)は、「到着した敦賀の美しい花園のある浜辺の民家。バナナやみかんなど見たこともない果物を食べ、日本の子供達と一緒に遊んだ」と語りました。

その間には悲しい話もあった。懸命に孤児達の世話をしていた看護婦の松澤フミさんは孤児の中から発生した腸チフスに感染し、23歳の若さで殉職した。彼女の死は多くの子供達や関係者に衝撃を与えた。事情を知らない幼子は、優しかった松澤看護婦の名前を呼び続け、周りの人達の涙を誘った。

彼女は、1921(大正10)年にポーランド国から赤十字賞、また1929(昭和4)年に名誉賞が贈られた。

7. 孤児達の帰国事業：

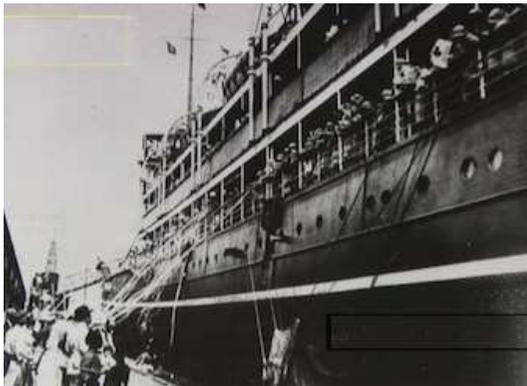
東京及び大阪に収容された合計765名のポーランド孤児達は、日本で病気治療や休養をした後、2年後、第1次は横浜港からアメリカ経由で、第2次は神戸港からインド洋経由でそれぞれ日本客船によって母国ポーランドに送り返された。

東京に収容された孤児達は、横浜から6回にわたり、諏訪丸で150名、香取丸で114名、伏見丸で106名の合計370名がアメリカを経由して、ポーランドへ送られた。

日本出発前には各自に洋服が新調され、さらに航海中の寒さを凌ぐため毛糸のチョッキが支給され、また多くの人から衣類やおもちゃの贈り物が届けられた。

大阪に収容された孤児達は、神戸から2回にわたり、香取丸で191名、熱田丸で199名の合計390名が香港、シンガポール、マルセイユ、ロンドンなどを寄港し、ポーランドへ送られた。

神戸港からの出発に際しても、孤児一人一人にバナナと記念品の菓子が送られた。出港の当日、船のデッキに孤児達が並び、「君が代」と「ポーランド国歌」を涙ながらに歌い、両国の旗と赤十字旗を千切れんばかりに打ち振り、「アリガトウ」「サヨウナラ」と叫びました。



シベリア孤児帰国船で君が代を歌う

8. シベリア孤児の組織「極東青年会」:

このようにして祖国に戻った孤児の中に、イエジ・ストシャウコフスキ少年がいた。イエジが17歳の青年になった1928年、シベリア孤児の組織「極東青年会」を立ち上げ自ら会長となった。「極東青年会」は順調に発展し、国内9都市に支部が設けられ、1930年代後半には会員数640名を数えるようになった。イエジ会長が日本公使館を表敬訪問した時、思いがけない人に出合った。それは、イエジ孤児がウラジオストックで日本に送り出される時に世話をしたウラジオストック日本領事の渡辺理恵氏で、再会した時、渡辺氏はポーランド駐在代理公使をしていた。

これが契機となって、日本公使館と極東青年会との親密な交流が始まり、極東

青年会の催し物には、努めて公使館全員が出席して彼らを応援していた。

1939年、ナチス・ドイツのポーランド侵攻の報に接するや、イエジ青年は、極東青年会幹部を緊急招集し、レジスタンス運動に参加を決定した。イエジ会長の名から、この部隊はイエジ部隊と愛称された。

戦時情勢の悪化にともないワルシャワでの地下レジスタンス運動も激しさを増し、孤児達のイエジ部隊にもナチス当局の監視の目が光り始めた。イエジ部隊が、隠れ家として使っていた孤児院に、ある時、多数のドイツ兵が押し入り強制捜査を始めた。

急報を受けて駆けつけた日本大使館の書記官は、この孤児院は日本帝国大使館が保護していることを強調し、孤児院院長を兼ねていたイエジ部隊長に向かって、「君達、このドイツ人に、日本の歌を聞かせてやってくれ」と呼びかけた。それに応えてイエジ達は立ちあがり、日本語で「君が代」や「愛国行進曲」等を大合唱する。さすがのドイツ兵達も、あっけにとられて立ち去って行ったという。当時、日本とドイツは三国同盟下にあり、ナチスといえども日本大使館には、一目置かざるを得ない状況であった。

しかし、兵力で圧倒的に勝るドイツ軍への抵抗は長く続づかなかった。部隊の関係者は徹底的に弾圧され、イエジも再びシベリアに送られていく。

ポーランドは、戦時下でドイツとソ連に分割され消滅するが、1945年のヤルタ会談で復活する。1948年に共産党支配体制が成立、国名もポーランド人民共和国と改めソ連の衛星国となったが、1989年プラハの春のワレサの民主化運動でポーランド共和国として再生した。

9. ポーランド孤児達は日本の恩を忘れていなかった:

イエジは常々「ポーランド人は何時ま

でも恩を忘れない国民である」と話していたが、1995（H7）に発生した阪神・淡路大震災の時のそれが実証された。

1996年、97年の2回にわたっての阪神大震災の孤児30人ずつが3週間の招待を受け、ポーランド各地で歓待を受けた。



ポーランドに招待された阪神震災の孤児

震災孤児が帰国するお別れパーティには、4名のシベリア孤児が出席した。歩行もままならない高齢者ばかりであったが、「75年前の自分達を思い出させる可哀相な日本の孤児達が来たからには是非彼らにシベリア孤児救済の話をお聞かせたい」と無理をおしてやって来られた。4名のシベリア孤児が涙ながらにバラの花を震災孤児一人一人に手渡したときには、会場は万雷の拍手に包まれた。

この働きかけをした中心人物は、東京のポーランド大使館に勤務していた物理学者で外交官、スタニスワフ・フィリペック氏。フィリペック氏はポーランド科学アカデミーの物理学教授だったがワルシャワ大学で日本語を学び、東京工業大学に留学の経験もあった。

祖母からヤポンスカ（日本）は、小さいけれどロシアを打ち負かした事がポーランド人にとって希望となり、勇気づけられた事、ヤポンスカ（日本）がポーランド人捕虜を手厚く扱った事、大勢のポーランド人孤児をシベリアの流刑地より助けた事、などを聞かされて育っていた。

この祖母の影響を受け、フィリペック氏は、日本に興味をわき、日本語を学び両国の友好のために働こうとしたと言う。